

## 第5章 基礎的調査

本章ではエリアデザイン像とランドデザイン像の検討を進める上で指針となった、平成25年度の未来構想会議における、各委員の提案内容(5-1)、パブリックコメント(5-2)についてまとめる。5-1の末尾に掲載したが、第10回未来構想会議(平成25年3月24日)では「ランドデザイン像 フローチャート」と称して、上記内容を取りまとめた資料を作成した。5-3では軽井沢の歴史を整理した資料を、5-4では地形的特徴を分析した資料を掲載する。

### 5-1 各委員の提案内容の概要

本項では平成25年度の未来構想会議における、各委員の提案内容についてとりまとめる。ここでは提案の概要について記述し、各委員が提示した資料や会議録等は第7章にて示す。

未来構想会議の委員は、造園・建築・観光・交通・スポーツ・芸術の計6分野の専門家から構成されており、各専門家からランドデザイン像の制作を見据えた提案があった。

#### 1)各委員の提案の概要

##### (1)造園(進士五十八委員)

造園の専門家である進士五十八委員からは、軽井沢ランドデザイン像作成を見据えた、下記の7つの方針の提案があった。

- ① 全国モデルになるような先進的なフィロソフィーからデザインまでの一貫性
- ② ランドスケープにおける時間のデザイン
- ③ 3つの持続性 自然・社会・文化
- ④ 自然的土地利用計画 (design with nature、土地利用における容量を決める)
- ⑤ 全町域を5地区程度にゾーニングし、自然・人工、歴史・現代、アクティブ・パッシブなどメリハリのきいた空間分節をする
- ⑥ 山地・里地のあいだに草地地帯をもうけ、野獣の侵入をふせぐ緩衝地帯とする
- ⑦ 農村の国づくりとして、面的修景計画をたて、展望地点をデザインする

##### (2)建築(花里俊廣委員)

建築の専門家である花里俊廣委員からは、旧軽井沢地区を中心とした、軽井沢の別荘文化やその歴史の変遷当、また文化遺産ともなりえる著名な建築等についての説明があった。

・「軽井沢避暑団」の設立および活動

1930年代にプロテスタント系宗教団の情報交換・親睦の場として維持するための集りであった。

- ・ 軽井沢避暑団ハンドブックについて

1930年の住所録、所有者名、各年の滞在者が記録されている。大正～昭和初期に外国人と日本人の別荘所有者数が逆転し、外国人は野尻湖国際村へ移っている。野尻湖国際村には、当時の生活スタイルが今も残されている。

- ・ ジャパンタイムズ紙の分析

集会場所(オーディトリウム)での催事、コンサート等はコミュニティ維持のためのシステムの一つであった。コミュニティの醸成感が失われていった。

- ・ 軽井沢における著名別荘建築等の紹介

名別荘が数多く点在しているが、所有者と設計者の意図が異なるため宣伝されていない。

### (3) 観光(安島博幸委員)

観光の専門家である安島博幸委員は、アジア諸国がヨーロッパ各国により植民地化された時代に、避暑地として発展した地域の現況を、写真や地形図を用いて説明した。これも踏まえ、軽井沢の位置づけについて解説があった。また軽井沢が持続的に発展するための方策についての提案があった。

- ・ アジアのヒルステーション

軽井沢のルーツに関係ある場所として、アジアの高原避暑地(ヒルステーション)を取り上げる。しかし、アジアのヒルステーションが軽井沢のお手本になるということではなく、むしろ悪い所を学んだ方がよい。ヒルステーションという言葉自体、植民地支配のためのものであり、軍隊や行政が下界の暑さでは過ごしていけないという理由で創った都市である。そういった面でも軽井沢とは意味合いが異なる。

- ・ 軽井沢の持続的発展に関する理論的考察

軽井沢の持続的発展に向け、下記の点が重要となる。

- ① 身体的価値を高める継続的努力
- ② 現代的な文化的コンテクストに基づいたまちづくり
- ③ 高度な文化的生活を支えるインフラ
- ④ 社会関係資本を発展させるソフト事業
- ⑤ 創造都市をめざす事業

#### (4)交通(浅野光行委員)

交通の専門家である浅野光行委員からは、「都市づくりとシェアする視点」についての話題提供があり、軽井沢の交通のあり方についても提案があった。

##### ①「シェアする兆し」

- ・都市計画、まちづくりとしても“シェアの兆し”を取り入れていく必要がある。

##### ②軽井沢の未来をシェアする視点

- ・自然と景観をシェアできる地域の再構築
- ・町民と別荘民が織りなす新たな連携
- ・地域と空間価値を共有する都市づくり

##### ③軽井沢町の現状を再確認し、未来へつなげる交通計画からのアイデア

- ・しなの鉄道駅を中心とした地域再編
- ・バス路線、バス停整備、LRT導入
- ・シェアドスペース導入
- ・しなの鉄道を中心に地域を再編、LRTの導入
- ・新型小型車両レーンの導入

#### (5)スポーツ(黒須充委員)

スポーツの専門家である黒須充委員からは、スポーツを通じてより良い社会を形成するための提案があった。

- ・スポーツは人間の身体に依拠した文化である

広く国民、市民の人達が日常生活の中にスポーツを取り入れて継続的にスポーツに親しむ事ができる成熟社会を実現していく事が大切である。

- ・生涯スポーツ社会の創造

潜在的なスポーツ参加者を定期的にスポーツに参加する様に変身させるためには、下記2点がポイントとなる。

①施設や指導者やプログラムを増加させ、より多くのスポーツ参加機会を提供する事

②スポーツに対する敷居を低くし、体力や技術のレベルに関係なく、気軽に参加する事ができる様にする事

生涯スポーツ社会を「アクティブな生活が楽しめる社会」だと再定義する事によって、人々の生活の中にスポーツが自然に溶け込んでいくのではないかという想いを持っている。

- ・総合型地域スポーツクラブとは何か

総合型スポーツクラブとは、地域住民の人達が自主的、主体的に運営し、全ての世代の人々が生涯に渡ってスポーツに親しむことができる環境を創っていく事を目指した非営利的な組織と定義することが出来る。地域スポーツを広めていこうとする動きは、自治あるいはシティズンシップの形成、自分の町のスポーツ環境は自分達でなんとかしていこう、自分の地域は自分で守っていこう、という自助公助の考えに繋がる。

- ・弱い絆の強さ、ポリシーミックス

これまでのような閉鎖的で封建的、かつ権威主義的（体育的）な体質ではなく、これからはそれぞれが自立して互いに他を尊重する様な対等に関わり合うパートナーシップ型の結びつきが重要になってくるだろう。自発的に地域コミュニティ活動を行う事の一つとして、スポーツは非常に有効なツールになるのであろう。

- ・スポーツと地域づくりの好循環

新しい公共を担う地域スポーツ組織の自立を促す事が、これからのスポーツの発展だけではなく地域社会の自立的発展に繋がる。ハードウェアを整備する考え方よりも、市民活動を促進するソフトウェア、さらに地域の人材を活用するヒューマンウェアの整備がこれからの軽井沢町のスポーツの発展には欠かせないだろう。

## (6) 芸術(森山明子委員)

芸術の専門家である森山明子委員からは、芸術の観点も織り交ぜながら、高原保養都市としての軽井沢を実現するための幾つかの方策の提案があった。

- ・ 未来構想にとっての日本と地域のデザイン

未来構想の受け皿はまず地域住民であるべき。各地域から豊かさを創出し享受する地域の生活や文化自体を別荘族や観光客に実感してもらうことが「もてなし」である。未来構想は、クリエイティブな能力を発揮しての総合的な構想でありたい。

- ・ 高原文化形成の地に対して

地域型芸術祭は過疎地型でも大都市型でもない企画が必要。テーマを歴史ある文学系で興すことはできないだろうか。

- ・ 宣教師居住をはじめとする国際性に対して

国際性を維持するために「宗教(宣教師居住から生まれた文化)」に代わるものは「スクール・オブ・アジア(小林りん)」のような教育や医療ではないだろうか。

- ・ サナトリウムをはじめとする病者の住処に対して

サナトリウムの歴史を活かして、高度医療または最適医療にとってのモデル地域になる道はないものだろうか。

- ・ 「産出」するイメージの希薄さに対して

サービス産業に加え、地域住民が誇りに出来るような何かを「産出」することを町の基盤の一角に加える方が町として健康になるのではないだろうか。それはクリエイティブシティの一角を担うものにもなるだろう。

- ・ 農産地修景の可能性に向けて

「産出」のテーマに修景を重ねる「農産地修景」が可能ではないだろうか。軽井沢で農産地修景が実現できれば、日本のモデルとなり得るのではないかと思う。

・アウトレット以上のシンボリックな集客装置の不足に対して

継続的でイメージの核となる軽井沢らしい出来事が必要ではないだろうか。軽井沢は極めて文学に対して神話性が高いイメージがあり、「歴史ある文学系」で何か出来ないだろう。

## 2)各地区フォーラムの概要

平成 25 年度末、前項で取りまとめた各委員の提案を元に、中村良夫委員長がエリアデザインの骨子となる「フォーラム」の概要を取りまとめた。最終的には「フォーラム」を「入り会いグリーン(コモンズ)」と呼称している。

その理念やその詳細は 8 章の委員長総括に譲り、ここでは平成 27 年度のグランドデザイン、エリアデザインの検討を進める際のベースとなった、平成 26 年度中の検討内容を示す。また、本項の末尾には、フォーラムの位置図を載せた。

ここで言うフォーラムとは、共同体の行事、作業、など集団利用を想定するとともに、町民の連帯、世代間の絆を強く意識して運用される場である。フォーラムは各分野からの意見を編み上げた、領域横断的なものであり、計 5 地区あるエリアのそれぞれに、1 つのフォーラムを設置する。

### (1) 聖祝祭プラザ(旧軽井沢地区)

- ・プラザ縁辺にアメニティー社交センターを設置する。
- ・軽井沢会、聖パウロ教会、愛宕神社、ショー記念礼拝堂、ユニオンチャーチ、熊野神社別当神宮寺、諏訪神社などを繋ぐ聖なる道と、銀座通りの賑わいが交わる聖俗十字路あたり一帯に構想する。

### (2) 芸術創遊フォーラム(新軽井沢地区)

- ・矢ヶ崎公園をフォーラムとし、大賀ホールと連携したメディアテーク型多目的ホールの可能性を検討する。

### (3) 湯川ふるさとグリーン(中軽井沢地区)

- ・湯川からグリーン内へ細流を引き込み、高原状のやわらかな起伏にそったその水辺に、築場カフェ、感性農園(そば栽培、収穫、脱穀、製粉から料理まで)、園遊席、湿地百花園、ふるさと百花草原、郷土草原を復原デザインする。野草フラワーアート、野草盆栽、盆石などにより浅間湯川流を発足する。
- ・湯川ふるさと公園を中心に沓掛、長倉地区、湯川兩岸ぞいに星野エリアまでの歩行自転車パークウェイを整備する。中軽井沢商店街、くっかけテラス、左岸シビックセンター地区を結ぶ。

#### (4)ユウスゲフォーラム(南地区)

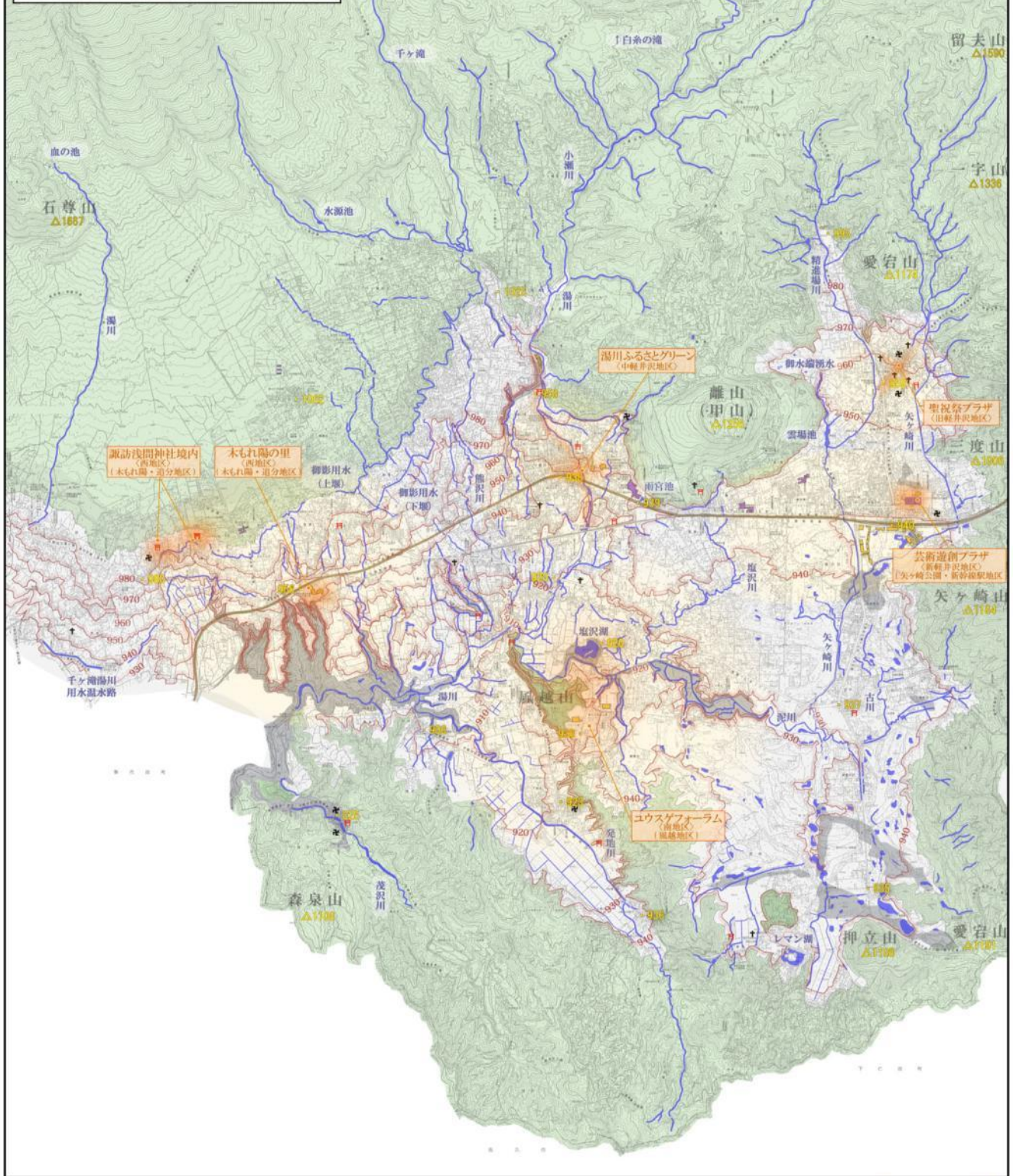
- ・風越公園と植物園自然園(ユウスゲ湿地帯)を庭園化し、地区の総合社交センターとしてのブラスリー(レストラン+カフェ+ビヤホール)を設ける。
- ・この地区は多くのスポーツ施設が立地するが、カフェ、レストランなど、広場的交流交歓の場を設ける事により、総合型地域スポーツクラブを中心とし、学校、老人クラブ、商店街、自主防災組織、各種町民団体、地区社会福祉協議会等とネットワークする市民的社会基盤(ソーシャルキャピタル)の形成を支援しつつ、新スポーツの創成をはかる。
- ・さらに軽井沢タリアセン、軽井沢アイスパーク、直売所(発地農村マルシェ)をつなぎながら、また鳥井原、油井、下発地、上発地、馬取など女街道沿いの古い農村の修景プランと連動しながら、軽井沢別荘文化、スポーツ、食文化、里山農村と異分野連携しながらクリエイターズ・コロニーなど芸術系の周辺立地も検討する。このような異分野連携の推進エンジンとして、宿泊をとまなうロビー機能の充実とともに、スポーツの現場や施設を風景として演出して見せる工夫によって、市民性(シチズンシップ)を育成する。
- ・通年型青少年総合スポーツセンター(宿舍つき)、クリエイターズ・コロニーなどの周辺立地を検討する。

#### (5)諏訪・浅間神社境内・木漏れ陽の里(南地区)

- ・木もれ陽の里内に本部をおき、追分地区、南側の農地や里山、溪谷を守備範囲とする社交福祉型フォーラム(感性農園・レストラン、都市交流型)寺社など宗教法人のまちづくり参加について研究の余地がある。



軽井沢町地形図〈ヤマ森・ハラ草地・ヌマ湿地〉  
—5地区とフォーラム—



凡例

	水	● 825	標高
	神社	▲ 1108	山の三角点
	寺		ヤマ
	教会(コミュニティ施設)		ハラ
	主要施設		ヌマ
	等高線(910~980)		



ベース地図「軽井沢町全図、平成21年、2万分の1」  
※4万分の1に縮小

5地区とフォーラムの分布

軽井沢グランドデザイン像 フローチャート

（第一回～第六回）  
**未来構想会議の要旨**

**軽井沢未来構想会議（第一回～第六回）の議事要旨**

**【造園】**

- ①全国モデルになるような先進的なフィロソフィーからデザインまでの一貫性
- ②ランドスケープにおける時間のデザイン
- ③④⑤の持続性 自然・社会・文化
- ④自然的土地利用計画（design with nature, 利用における容量を決める）
- ⑤全町域を5地区程度にゾーニングし、自然・人工、歴史・現代、アクティブ・パッシブなどメリハリのきいた空間分節をする
- ⑥山地・里地のあいだに草地帯をもつけ野獣の侵入をふせぐ緩衝地帯とする
- ⑦農村の国づくりとして、面的修景計画をたて、展望地点をデザインする。

【議論】ライフスタイルダイバーシティ、地形と土地利用

・戦前の軽井沢（「軽井沢遊藝団」の設立および活動  
 →1930年代にプロテスタント系宗教団の情報交換・観劇の場  
 ・外国人別荘地の地理的偏在 → 愛宕～ハッピーバレー地区に現在も250棟のうち37棟（約1/4）の別荘が残っている  
 ・ジャパントイムズ紙（記事、年次総会、スポーツ行事、交流催事等）  
 →集会所（オーデトリウム）での催事、コンサート等によるコミュニティ維持  
 ・軽井沢における著名別荘建築等  
 →所有者と設計者の意図が異なるため宣伝されていない  
 【議論】別荘文化財の今後（保存と継承、コミュニティ維持）

**【観光】**

- ・アジアの高原避暑地（ヒルステーション）にルーツがある
- ・軽井沢の持続的発展に向けて
- ①身体的価値を高める継続的努力
- ②現代的な文化的コンテクストに基づいたまちづくり
- ③高度な文化的生活を支えるインフラ
- ④社会関係資本を発展させるソフト事業
- ⑤創造都市をめざす事業

【議論】軽井沢の役割一観光地・保養地・創造都市

**【芸術】**

- ・シェア（share）すること
- 環境・開発とシェア、土地利用計画と空間のスプリット
- 土地利用のスプリット化と共同利用、「公と私」・「官と民」の空間シェア
- 交通計画とシェアする視点、地域のシェアと連携
- 都市づくりの時間と価値の共有
- ・しなの鉄道を中心に地域を再編、LRTの導入
- shard spaceの導入、新型小型車両レーンの導入

【議論】軽井沢の地にシェアの概念を取り込む可能性

**【スポーツ】**

- ・生涯スポーツ社会の創造（アクティブな生活が楽しめる社会）
- スポーツ参加機会の創出、スポーツの解釈の拡大
- ・強い絆の強さ（互いに他を尊重して対等に闘い合う）
- ・異分野誘導、ポリシーミックス

【議論】アイデアの空間への翻訳  
 別荘民のスポーツ

**【パブリックコメント】**

- ①環境の豊かさを体感できる空間計画  
 歩行者・自転車優先、浅間山の眺望、自然体験、多様な地形・地質、各地区の連結
- ②居住者が身近なコミュニティ・環境を創造するシステム・場の構築  
 主体的な住民、自然環境の維持、充実したコミュニティ単位  
 持続可能な規模、メリハリある土地利用
- ③軽井沢独自の文化・精神をまちづくりへ展開する  
 品位ある町構え、国際交流・コミュニケーション、質の高い観光地・保養地

**【ヒアリング】**

- A. レンジャー隊の創設、林間学校の開設、ウォーキングレールの体系的な整備
- B. 軽井沢に求められるアイデンティティ  
 →ノイズを取り除く、観光一割論
- C. 軽井沢のブランド力の維持  
 中軽井沢の改善・役割（知識と交流、商店街コミュニティの強化、景観デザイン）

（第七回～第八回）  
 ※詳細は中村委員長作成「基本思想と原則」を参照  
**軽井沢100年未来像**

**高原遊創圏（軽井沢風土自治圏）**

2013年/12/24改訂

三元自治の回復 - 身体・社会・大地 -

**軽井沢風土自治圏の姿**

（天・地・人のまちづくり）自治、共有、健康  
 創造、風土、「元氣」を浴びる町、元氣浴の町

- 風土文化自治 - 絆の継承と発展 -**  
 自然保護対策要綱、善良なる風俗を維持するための要綱、地区計画  
 樹木より低い建築、タウン・マネージメント、トラスト、環境容量  
 祝祭プラザ、パトナシップ型「弱絆の強さ」
- 共有と共生 - 場所の多様性 -**  
 シェア文化、町民フォーラム、ヘテロトピア（不均質混在空間）、多様な植生  
 歴史遺産、永住と保養、社交型福祉、総合社交型地域スポーツくらぶ  
 多様なライフスタイル、デュアルモードLRT、ソーシャルキャピタル
- 身体・大地の健康 - 生命の輝き -**  
 地産地消、食文化、スポーツコミュニティ、スロー風土、地母性  
 地霊（大地の記憶）林相、里山、感性農園、  
 ウォーキングサイクリング・トレイル、生命共同体、労働と手作業
- 創造と社交 - 知と情の饗宴 -**  
 芸術、文学、工芸、学術、感性文化による市民交流、サロン、社交  
 コミュニティ生成、学俗接近、夏期大学、クリエイターズ・コロニー
- 風土へ - 大地と人間の詩学 -**  
 風土の解釈と風景表現、懐風狗水の地相、浅間山選拝巡り（生命美学）  
 原風景（ヤマ森/ハラ草地/スマ湿地）、美しい村、風立ちぬの世界（高原遊創文化）  
 元氣浴、新風土主義、造園知、ジェオパーク、風土の持続性

**原則の方法的思想的特徴**

- 1 理念性**  
 将来像より前に100年有効な理念を、長期的展望、フィロソフィとデザインの整合
- 2 自己言及性**  
 将来像は町民から離れたお題目ではない。その達成は関係者の自己変革と修養を求める
- 3 価値の多様性**  
 ライフスタイルと風景の多様性
- 4 関係の変革と活性化**  
 人、モノ、自然 3者相互の複雑な絡み合いと活性化から新しい価値を生成。  
 ・方法としてのプリコラーージュ（創造的寄せ集め）  
 ・制度のヘテロトピア的融合  
 （公園+福祉+市場+多目的ホール+レストラン+社交型農園+学校など）  
 ・領域の越境（専門家と市民、文化と自然、アートと生活、スポーツと農業、  
 河と公園、駅と図書館、心と身体=精神としての身体、環境+文明+歴史=風土）
- 5 思想と風土の視覚化、感覚化→風景知、造園知、建築文化  
 食文化（キュリナリー・アート）、工芸文化、ファッション文化**
- 6 「人間中心型合理主義のおわり」天・地・人のまちづくり**  
 自然保護から生命共同体へ  
 健康、絆、環境を編み直す新・風土主義へ。軽井沢はそれを育む文明のアトリエになる

**制度の提案** (1) 軽井沢風土文化アカデミー (2) フォーラムの設置 (3) 市民トラスト (4) タウンマネージメント (5) 高原文化圏縦貫風景街道

**各地区フォーラム**  
 （フォーラムの空間規模、目的、景観的性格、運営形態により）グリーン、テラス、プラザ、入り会いなどと呼ぶ）

主運体	場所・空間像	〈旧軽井沢地区〉	〈新軽井沢地区〉 （矢ヶ崎公園・新幹線駅地区）	〈中軽井沢地区〉	〈南地区〉 （風越地区）	〈西地区〉 （木もれ陽・追分地区）
		<b>聖祝祭プラザ</b>	<b>芸術遊創フォーラム</b>	<b>湯川ふるさとグリーン（入り会い）</b>	<b>ユウスゲフォーラム</b>	<b>諏訪・浅間神社境内・木もれ陽の里</b>
		軽井沢会、地元町内会、軽井沢キリスト教会、軽井沢観光協会などの連合を検討	未定	軽井沢風土文化アカデミーが運営を担当し当面、くっつけテラスに本部を設置し、市民的な紐帯を促進しながら、次世代まちづくりのエンジン機能をそだてる。	未定	未定
		プラザ緑地にアメニティー社交センターを設置。	矢ヶ崎公園をフォーラムとし、大賀ホールと連携したメディアテーク型多目的ホールの可能性を検討。	湯川からグリーン内へ細流を引き込み、高原状のやわらかな起伏にそったその水辺に、築場カフェ、感性農園（そば栽培、収穫、脱穀、製粉から料理まで）、園遊席、湿地百花園、ふるさと百草原、郷土草原を復元デザイン。野草フラワーアート・野草盆栽・盆石などにより浅間湯川流を発足。	風越公園と植物園自然園（ユウスゲ湿地帯）を庭園化し、地区の総合社交センターとしてのプラスリー（レストラン+カフェ+ビヤホール）を設ける。 この地区は多くのスポーツ施設が立地するが、カフェ、レストランなど、広場的交流交歓の場を設ける事により、総合型地域スポーツクラブを中心とし、学校、老人クラブ、商店街、自主防災組織、各種町民団体、地区社会福祉協議会等とネットワークする市民的な社会基盤（ソーシャルキャピタル）の形成を支援しつつ、新スポーツの創成をはかる。 さらにまた、軽井沢タピアセン・軽井沢アイスパーカー、直売所（発地農村マルシェ）をつなぎながら鳥井原、油井、下発地、上発地、馬取など女街道沿いの古い農村の修景プランと連動しながら、軽井沢別荘文化・スポーツ・食文化、里山農村と異分野連携しながらクリエイターズ・コロニーなど芸術系の周辺立地も検討。このような異分野連携の推進エンジンとして、宿泊をとまなうロボ機能の充実とともに、スポーツの現場や施設を風景として演出して見せる工夫によって、市民性（シチズンシップ）を育成する。 通年型青少年総合スポーツセンター（宿舎つき）クリエイターズ・コロニーなどの周辺立地を検討。	木もれ陽の里内に本部をおき、追分地区、南側の農地や里山、溪谷を守護範囲とする社交福祉型フォーラム（感性農園・レストラン、都市交流型）寺社など宗教法人のまちづくり参加について研究の余地有り

※第九回会議にて、エリアデザインの具体的なイメージを検討

（第七回～第九回）  
**エリアデザイン像**  
 【50年後】